

決められない男たち

登場人物

市川… 伍長。 一番年下。 元役者。

二島… 一等兵。 元脚本家志望。

光井… 一等兵。 元素人演劇経験者。

何も無い部屋。 部屋の外に通信機がある。

舞台上には二島と光井。 ダラダラと考え事をしている。

2人は自作の台本のタイトルを考えている。

二島
んー……

二島、何かを思いついて

二島 「ドカピン」。

光井 ……強いっすねえ。

二島 だろ？

光井 いや、悪くないとは思っすよ。

二島 だろ？ こう……ドカピン！ って出ると印象強くない？

光井 っすねえ。

二島 だろ？ ビラに「ドカピン」ってあったら、

光井 っすねえ。

二島 だろお。

光井 でもこう……音だけというか、こう……意味とかが。

二島 意味？

光井 ストーリーとつながらないじゃないですか。

二島 そんなの観ればわかるだろ。

光井 観る前に分らせるのがタイトルじゃないですか。

二島 観る前に分かっちゃったら面白くないだろ。

光井 そりゃそうっすけど、思わせぶるのがいいんじゃないですか。「もしかして？」みたいな。

二島 「もしかしてこんな話なのかな？」みたいな。

二島 それを裏切るのが良いんだろ。

光井 いや、そりゃ良い裏切りならっすよ。「面白い！」って思わせる裏切りの場合っすよ。

二島さんの場合はイマイチな裏切り方っすよ。「なんだ、何もないんだ」って思われる

裏切りの場合っすよ。

二島 なんだよ。

光井 だって嫌でしょ？ 「最強ラーメン！」って看板があつてですよ？ 「もしかして？」

って思うじゃないっすか。「もしかして最強に美味しいラーメンなのかな？」って思

うじゃないっすか。

二島 いや、俺は「もしかして最強の武人がつくったラーメンなのかな？」って思う。

光井 ……最強の武人？

二島 世界中で修業を積み、道場破りを重ね、剣の道のみならずありとあらゆる武道をおさめた屈強の猛者が、ある時さびれた店で一杯のラーメンと出会い、衝撃を受け、自分のしてきたことの無意味さを悟り、年離れた店主に弟子入りしてラーメン道を歩み始め、求める味にたどり着かないもどかしさに悩み苦しんでいたそのさなか、師匠が病気で倒れてしまい、ベッドの傍で泣き震えるその男の肩に師匠はそっと手を置き言った。「いいか、弟子よ……。ラーメンは勝ち負けじゃねえ。本当に美味しいラーメンは……人を包むんだ。どんな人も、その味に包まれる。そこに勝ち負けはねえ。ただ……優しさと温かさがあるだけだ。」……と。

光井 師匠！

二島 「強くなれ、弟子よ……」そう言って師匠はそっと息を引き取った。

光井 師匠ー！

二島 男は本当の強さを知り……ついに自分の店を持ったんだ。

光井 違うんだよな。

二島 誰もを包み込む広さ、それが最強の……ラーメン。

光井 そうじゃないんすよ。そこじゃないんすよ。

二島 何だよ。

光井 つまりっすよ？ 「最強のラーメン」って聞くと、「こういうラーメンなのかな」って考えるじゃないっすか。「こういう寿司なのかな」とは思わないじゃないっすか。

二島 だってラーメンだろ？

光井 店に入って、カレーしか置いてなかったらどう思います？

二島 ラーメンはどこに行ったんだよ！

光井 ね？ そう思うでしょ？ そういうことっすよ。

二島 なにがだよ！ ラーメンはどこ行ったんだよ、ラーメンは。もう完全にラーメンの口になっちゃっただろ。

光井 ね？ そう思うでしょ？ だから、そういうことですよ。

二島 は？

光井 嫌な裏切り方ですよ。そういうたとえ話ですよ。

二島 お前、ラーメンの想像だけさせといて何も無いのかよ！

光井 ね？ そう思うでしょ？ つまり、そういうことですよ。

二島 なんだ……何も無いのかよ……。

光井 つまりっすよ？ タイトルにインパクトがあっても、実際に観て、「何も無いのかよ」ってなったらガッカリするっすよ。逆に「こういうことだったのか！」って驚きがあったら楽しいでしょ？ 「最強のラーメンって、最強の嫁が作るラーメンの事だったのか！」ってなったら楽しいでしょ？

二島 結婚なさってたんですか！

光井 いや、たとえ話っすから。

二島 ああ……。

光井 本編を想像させつつ、いい意味で裏切る。その含み加減で、タイトルの質って決まると思うんすよ。

二島 じゃあお前はどんなのが良いと思ってるんだよ。

光井 そうだな……「亀の子マルハセの大冒険」とか。

二島 結構そのまんまじゃないか。

光井 いいんですよ、「どんな大冒険かな?」と思わせるのが大事なんすから。

二島 「どんな大冒険かな?」って、どんなもこんなもないだろ、大冒険なんだから大きな冒険に決まってる。そこまでわかっちゃったら面白くないだろ。

光井 何ですか、大きな冒険って。

二島 規模の大きな冒険だよ。

光井 分かりましたよ、大冒険はそれでいいですよ。でも「亀の子ってなんだろう?」ってなるでしょ?

二島 亀の子は亀の子だろ。

光井 「マルハセってなんだろう?」ってなるでしょ?

二島 マルハセはマルハセだろ。マルハセは……そんな話に出てこないよな?

光井 そこは、思わせぶりですよ。

二島 なんだよお前、できるやつみたいな顔しやがって。結局関係ない単語いれこんじゃってるじゃないかよ。

光井 少なくとも「ドカピン」よりはできるでしょ。

二島 なんだお前、生意気だな。

光井 自分の方が面白くないからってひがまないでくださいよ。

二島 何だと? 先輩に向かって失礼な!

光井 最初に無礼講って言ったの二島さんじゃないですか!

二島 口答えするか貴様!

光井 悪いもんを悪いと言わずして何が芝居人ですか!

そのとき、何かが落ちる音が鳴る。轟音。

2人、素早くその場に伏せ様子を窺う。

2人 ……。

沈黙。

二島 市川伍長は?

光井 はっ。歯磨き中でありませう。

二島 ……。

光井 ……。

沈黙。

しばらくして、立ち上がる。

二島 歯磨き中ってなんだよ。

光井 はっ。なんでもお昼に食べたカエルの筋が歯にはさかったとかで。

二島 あの人、ああいうところあるよな。

光井 はっ。しかしながら、筋が歯にはさかるのは、やはり気になるものですから。

二島 まあ気持ちはわかるけど。

光井 はっ。

二島 ところで

光井 はっ。

二島 もういいよ、それ。

光井 あ、そうっすか。

二島 思ったんだけど。

光井 はい。

二島 話の方を変えた方が良さそうな気がしてきた。

光井 話っすか？

二島 うん。だってだよ、ストーリーとの差を意識しすぎるから、タイトルに縛りが出来ち

ゃってるってことだろ？ 本当は「ドカピン」ぐらいのインパクトがあったほうがい

いののに、ストーリーが足引っ張っちゃってるんだよ。

光井 だ。インパクト。

二島 そうだよ、大事だよ、インパクト。お前、國士知ってる？

光井 國士？

二島 アイツの作品に、「命を遊ぶ男ふたり」っていうのがあるんだよ。「命を遊ぶ」って、

ちよっと印象的だろ？ 「何だろう？」って思うだろ？

光井 確かにそうっすね。

二島 中身は男二人が延々話してるだけなんだよ。俺だってそれくらい書ける、というか俺

の方が面白いもの書ける。でも俺は売れずに、國士の戯曲は売れている。ハイなぜか？

光井 インパクト？

二島 そうだよ。結局はタイトルなんだよ。

光井 いや、それはそうかもしれないけど、ストーリーのためのタイトルじゃないですか。

二島 パッと見て面白そうじゃなきゃ、中身も共倒れだろ。芝居全体の為にも、タイトルは

「ドカピン」にした方がいいんだよ。「命を遊ぶ」に勝るには、「ドカピン」ぐらいの

インパクトがいるんだよ。

光井 でもそれ、強いだけで、もはや別の話みたいになってますから。

二島 そう。だからもういっそ、タイトルに合わせた別の話を作った方が早いんじゃないか

なって。

光井 ええ……？

二島 逆転の発想だよ。

光井 はあ……。でもタイトルに合わせた話って、どう作っていったらいいか。

二島 そこは身体はってなんぼだろ。

光井 はい？

二島 例えばさ？ 「ドカピン」があるだろ。

そこへ、歯ブラシを加えた市川が入ってくる。

市川 やばいやばいやばい。結構近くだったよね今の。結構やばい感じだよね今の。

二島、突然倒れる。

光井 二島さん！

市川 おおい、どうしたどうした。

光井 市川さん！ 二島さんが、二島さんが！

市川 落ち着け、落ち着け光井。どうした、何があった。

光井 さっきのあの、アレで、余波を浴びて！

市川 何だと？ おい！ 二島！ 大丈夫か、二島！ 光井、あそこのあの、洗濯物のところにアレあるから。救急箱！

光井 はい！ 救急箱！

市川 救急箱！

光井出ていく。

二島 市川伍長……

市川 二島！ なんですぐに逃げなかったんだ、お前は……。しっかりしろ、今光井が救急箱持ってくるからな。

二島 自分……これだけは、お伝えしたくて……

市川 なんだ？ ちょっと待ってろ、ちょっと歯ブラシ置いてくるから。

二島 やつらの……

市川 やばい、垂れる垂れる。

二島 市川さん！

市川 ちょっと待ってちょっと。

二島 やつらの、最終兵器が分かったんです。

市川 ……なんだと？

二島 それだけは確認したくて、逃げずにいたんです……。

市川 二島……

二島 本部に伝えてください……その兵器の名は……

市川 その名は

二島 ……ドカピン。

市川 ドカピン？

二島、力なく目を閉じる。

市川 二島——！……あつ、垂れる垂れる。
 二島 きったな！
 市川 うわっ、生き返った。

光井、救急箱をもって現れる。

光井 そういうことっすか。
 二島 あつぶな！ ちょっと止めてくださいよ、なんでそんな物くわえて来るんですか！
 市川 だから置いてくるって言ったのに。
 二島 だから初めから置いてくればいいでしょ。
 光井 これ、戻してきますね。
 二島 ああ、ごめん。
 市川 なんだよ、嘘なの？
 二島 こういふことだよ。
 光井 そういふことっすか。

光井、救急箱をもって出ていく。

市川 何？
 二島 いや、タイトルをですな。考えてて。ほら、前に芝居の台本考えてるって話で。
 市川 ああ、言ってたな。
 二島 話は考えたんですよ。で、タイトル決めようってところで、なあ。
 光井 (戻ってくる) そうなんすよ。決まらなくて。
 市川 タイトルが？
 二島 そう。
 光井 っす。
 市川 ほー。……ああ、ちょっと。

市川、歯ブラシを置きに出ていく。

二島 なんで啞えて出てくるんですか。
 市川 ほわほわほわ(やばいと思って)
 二島 あの人、ああいうところあるよな。
 光井 筋とれたんですか？
 市川 ほへは(取れた)
 光井 良かったっす。
 市川 (うがいの音) それでー？
 光井 二島さんが変なタイトルばっか考えるから、「それはどうなんだ」って話になって
 二島 変って言うなよ。お前だっけ無理やり捻ろうとしてただろ。
 光井 二島さんのは、あんまりにも脈絡がないじゃないですか。

二島 期待を裏切るのがいいんだって。
だから悪い裏切りですって。「最強のラーメン」ですよ。
光井

市川、すっかりして戻ってくる。

市川 最強のラーメン？

光井 市川さん、「最強のラーメン」って看板があったらどう思います？

市川 「もしかして最強に美味しいラーメンじゃないかな」って思うよ。

光井 でしょ？ で、お店に入ってカレーしか置いてなかったらどう思います？

市川 「美味しそうなカレーだな」って思うよ。

光井 え？

二島 ほら。

市川 何が？

光井 え？ だって、「最強のラーメン」って看板が立ってるんですよ？ ドドーンと、店の前に。それ見てどう思います？

市川 「美味しいラーメンなんだろうな」って思うよ。

光井 で、結局カレー食わされたらどう思います？

市川 「美味しいカレーだな」って思うよ。

光井 は？ だって「最強のラーメン」ですよ？

市川 そうだね。

光井 出てきたのはカレーですよ？

市川 そうだね。

光井 は？

二島 ほら。

市川 何が？

光井 なにが「ほら」ですか！

二島 結局看板と中身が関係なくたっていいんだって！

光井 いやいやいやこれは特別でしょ！

二島 でも居ただろ、ここに！

光井 少数意見だけで自分の正当性を主張しないでくださいよ。

二島 なんだと！ もう一回言ってみろ！

光井 何すか！

二島 意味が解んなかったんだよ！

光井 自分の意見押し付けるなっことですよ！

二島 面白味のないやつ出すよりマシだろ！

光井 タイトルだけで面白くても意味ないじゃないですか！ というか「ドカピン」ってわけわかんないだけで全く面白くないっすよ。

二島 なんだと！ お前さっきから生意気だそ、ホントに！

市川 こらこらこら。落ち着け、落ち着かんか。喧嘩はいいが、演劇に上下関係持ち出してもいいことないぞ。舞台上では平等、対等。立場も年齢も関係ないんだ、一緒に作っ

ていくんだよ。

何ですか、知ったような口で……。

光井 二島 こら！ お前なんてこと言うんだよ。市川さんはな、東京で役者やってたんだぞ。

光井 二島 えっ、そうなんですか。

光井 二島 東京だぞ？ 花の下北沢だぞ！

光井 二島 すっげー！

市川 二島 いやいや、大した役やってないから。僕なんて端っここの役だから。

光井 二島 端っこで役者やってたんだぞ。

光井 二島 すっげー！

市川 二島 いや、ホントに。主役の近くに立ってるだけみたいなの。

光井 二島 主役の近くに立ってたんだぞ。

光井 二島 すっげー！

市川 二島 いやいやいや……（決めポーズ）

光井 二島 見ろ！ これが東京役者だぞ！

光井 二島 すっげー！

市川 二島 いやいやいやいや……（決めポーズ）

光井 二島 だぞ！

光井 二島 すっげー！

市川 二島 いやいや……（咳払い）で？ タイトルがなんだって？

光井 二島 結局、俺たちの言い争いに決着はつかなくて。

光井 二島 つす。

二島 そのとき、俺思いついたんですよ。タイトルに合わせて話を考えた方が早いんじゃないかな

いかって。

市川 二島 ほー。

二島 逆転の発想ですよ。

光井 二島 まあ確かに、このまま不毛な戦いを続けるより、根本的に変えた方が良いとは思いま

すけどね。

二島 だろ？ 実際「ドカピン」は、今の感じの方がしっくりくるだろ？

光井 二島 つすねえ。

二島 だろ？

市川 二島 なるほどなあ。

二島 例えばだよ、えー、「春はめすぶた」ってタイトルがあったとするだろ？

光井 二島 なんですか、それ。

二島 それを今から考えるんだろ。

光井 二島 ああ……。

3人、考える。

市川 二島 春はめすぶた……夏は牡牛？

二島 秋はめんどり、冬はいのしし？

光井 それはとある農村での物語。春。

即興の小芝居が始まる。

二島 「やれやれ、今日も良く働いた。おーい、帰ったよ」

市川 「あらおかえりなさい」

二島 「お前、ちよつと見ないうちに随分肥えやがったな」

市川 「そう？」

二島 「なんかこう……横にも、縦にも」

市川 「おいしいものが多くて困っちゃうわ。ついつい食べちゃって」

二島 「ああ、もう「めすぶた」と呼んで過言ではないくらいに」

市川 「まー、失礼なこと。見てなさい、夏にはすっかり痩せてみせるから」

光井 夏。

二島 「お前、すっかり細くなったなあ」

市川 「でしょう？ それに、きれいになったでしょ？」

二島 「いや、ほんとに（近づこうとして）」

市川 「あら、だめですよ（逃げる）。人をめすぶたなんて呼ぶ人には気安く触らせません」

二島 「この野郎」

市川 「こっちにおいで」

二島 「おい、待て」

市川 （袖をひらひら）

二島 「モ〜」

市川 「うふふ」

二島 「モ〜」

光井 秋。

二島 「頑張れ！ もうちよつとだぞ！」

市川 「うーんうーん」

二島 「ほら、ヒッヒッファー、ヒッヒッファー」

市川 「ヒッヒッファー、ヒッヒッファー」

光井 「おんぎゃー、おんぎゃー」

二島・市川 「う、生まれた！」

光井 「おんぎゃー、おんぎゃー」。冬。（走り回る）

市川 「こらこら、危ないよ、お前」

二島 「元気な子だ」

市川 「全くもう、あちこち走ってはぶつかるとですよ」

二島 「まるでうりぼうだな」

市川 「まあ、じゃあ、めすぶたと牡牛の間にうりぼうが生まれたってわけね」

二島・市川 「あっはっはっは」

光井 「ばぶー！」

沈黙。

市川 ……いけるのかな。

二島 いけるでしょ！

光井 すごく微妙な気持ちですよ。

市川 頑張った方だとは思うけど。

二島 回数こなせばいけますよ！ なんだか今日は名作が生まれる予感がする。

市川 そう？

光井 迷走の予感がしますけど

市川 ああ……。

そのとき、遠くで何かが落ちる音が鳴る。鈍い轟音。

3人、音の鳴る方を見る。

市川 遠いなあ。

沈黙。

市川 向こうの方だったね。

光井 つすねえ。

市川 さっきのは近かったよね。

光井 つすねえ。ちょっとビビりましたもん。俺、久しぶりに口調戻りましたよ。

市川 そうなの？

光井 「はっ」って。

市川 懐かしー。

二島 一応、報告しておきますか？

市川 もう1回きたらでいいでしょ。

二島 了解です。

光井 いつまで続くんすかね。

市川 そりゃ、終わるまでだよ。

光井 いつ終わるんです？

市川 そりゃあ、誰かが言い出すまで。

光井 誰かが。

二島 一応、様子見てきますか？

市川 いいよいいよ、危ないから。

二島 了解です。

市川 しかし、タイトルねえ、あんまり考えたことなかったな。

光井 時代に囚われない、新しい感覚のタイトルが良いっすね。

二島 「ドカピン」は？

光井 訳わかんないだけじゃないっすか。何でそんなにこだわるんですか。

市川 あんまり聞いたことない響きだけどね。
 二島 ですよ？ 新しいですよ？
 市川 まあでも、聞いたことないってだけだからね。
 二島 ダメですか……。

市川 でも、つながらなさそうな単語同士を繋げるのはアリじゃない？ 聞いたことない感じになるんじゃないかな。なんだろ、「苦い弾丸」みたいな。

光井 確かに。ちよつと新しい。

二島 「鮮やかな音色」みたいな？

市川 なんか綺麗だね。そうだな……「響く花束」みたいな。

光井 「鳴る」……いや、「鳴り渡る」とか？

市川 鳴り渡る？ ……「鳴り渡る……空は」

二島 空は……「何色」？ みたいな？

光井 「鳴り渡る空は何色」？

市川 色ね。なるほどね。確かにね。

二島 なんか、降ってきましたよ。こう、上から。

市川 つながったな。

二島 つながらなさそうな単語が。

光井 奇跡的に。

市川 鳴り渡る……鳴り渡るか……えー……。

二島 「ゴーン……ゴーン……」

光井 (同時に) 「いやあ、今年も終わるねえ」……

市川 (同時に) 「いやあ、ニコライの鐘も鳴る」……

3人、目くばせし、光井案が採用される。
 即興の小芝居が始まる。

市川 「なー。あつという間だったな」

光井 「気がついたら年の瀬だよ、まだなんにもしてないってのに」

市川 「なんにもってことはないだろ。今年、なにした？」

光井 「いやあ……銃構えたまま、1発も撃たずに1年終わっちゃった」

市川 「確かに。俺も逃げ回ってるうちに終わっちゃったよ」

光井・市川 「はっはっは」……。

二島 「お待たせ」

市川 「遅いぞー」

二島 「ごめんごめん。ほれ、おしるこ」

市川 「おっ、気が利くね」

光井 「いいねえ、頂くよ」

二島 「ま、泥水だけどな」

光井・市川 「泥水かよー」

3人 「はっはっは」……。

二島 「で？ 2人は今年やり残したことないの？」
 光井 「やり残したこと？ そうだな……栄養補給かな」

市川 「俺は安眠かな」

二島 「俺は安全確保だな」

3人 「はっはっは」……。

市川 「見ろよ、今夜は綺麗な月だ。きっとあの月の下に俺たちの故郷がある」

光井 「ああ、耳を澄ませば聞こえて来るぜ。町に鳴り渡る除夜の鐘の音が」

二島 「向こうはもうすぐ元旦か。きっと美しい初日の出が拝めるんだろうなあ」

光井 「夜明けの空がどんなだったか、今でもはつきりと思い出せる」

市川 「そうかい？ そりゃ一体どんな色だった？」

3人 「鐘が鳴り渡るふるさとの空は、一体どんな色だったかい？」

3人、笑い合う。

やがて笑うのをやめ、座り込む。

市川 いや……うん……ちょっとまって。

光井 これはちよつと良くないっす。良くない方に行っちゃったっす。

市川 演じやすかったけどね？ 演じやすかったっていうか現実的過ぎてね？

二島 (泣く)

光井 あーあー二島さんが、二島さんが。

市川 しっかりしろ二島！ 寂しくなっちゃったな。帰りたくなっちゃうな。

光井 でも話振ってきたのは大体二島さんですけどね。

市川 そうだね。

二島 (涙をぬぐい) いや！ でもいける気がしますよ。さっきより上達しましたよね？

市川 まあね、うん。いや、さっきよりはよかったと思う！

光井 ちよつと希望が見えましたよ！

二島 だろ？ な？ 続けていけば、いいもの出来ますよ！

市川 そうだな、よし！ 次いこう、次！

光井 つすね、名作つくりますよう！

3人 おお！

その時、大きな音が鳴る。轟音。

全員その場に伏せる。

二島 近い！

沈黙。

市川 光井、報告！

光井 はい！（出ていく）

二島 俺、見てきます。

市川 止めとけ、危ないから！

二島 でも。

市川 見なくても分かるだろ？ 誰かが倒れてるよ。それだけだよ。

二島 でも、俺たちの仕事です。

市川 僕たちの仕事は、生き残って帰ることだから。

二島 市川さん。

市川 いや、解ってるよ？ 二島が正しいよ。でもさ、行ってどうするのかって話。こっちが勝ってたらいいよ。でも負けてたら？ 応援しようにも、何も無いじゃない。僕たちが用意できるものなんて、通信機と、救急箱と、歯ブラシとカエルと、3人分の命だけだよ。

二島 そうですけど、それでいいんですか？

市川 いいんだよ。

二島 市川伍長。

市川 いいんだって。しょうがないだろ。じゃあお前何かできるの。素手で戦いに行けんの。

二島 お前が行ったって、人が1人死ぬだけだから。それ以上の何にもならないんだよ。

市川 だからって、向こうで戦ってる仲間を見捨てろって言うんですか！

二島 そうだよ！ 見捨てるんだよ！

市川 お前それでも日本人か！

市川 じゃあどうしろって言うんだよ！ 3人仲良く自爆しに行くか？ 冗談じゃない。僕はお前が折角生き延びて、芝居の話ができる仲間に出会って、ここに居られるんだ。僕は役者だ。帰ってまた芝居をするんだ。

二島 市川さん。

市川 2人を殺すのはもつとごめんだ。2人とも僕より年上なのに、向こうに行ったら命令しないといけなくなるだろ？ それも嫌なんだよ。上官に向いてないんだ、僕。けど僕の命令でお前たちがここに残るなら、僕は権力行使する。様子は見に行くな。ここで待機。繰り返し返す、待機だ。

二島 ……すみません。

市川 二島あ。

二島 タイトル、良いのが決まったら報告ください。

市川 待機だ……。

二島 失礼します！

市川 二島！

二島、行きかけて戻ってくる。

二島 みたいなの！

市川 みたいなの！

二島 今のとこ、結構いいんじゃないですか。

市川 いいねー。ちよっと入りこんじゃったよ。

二島 やっぱり、ガツと来るのはいいですよ。気持ちがいい。
市川 雰囲気でいけちゃうな。

光井、戻って来る。手に袋を持っている。

光井 報告してきました。
市川 おう、なんだって？
光井 いや、もう返ってこないんで、分からないですね。
市川 そうかあ。
二島 ちよ、今な、すごくいい感じだったんだよ。
光井 え、今？
市川 ちよっとね、名作でかけた。
光井 ええ？ なんで2人でやっちゃうんすか。
二島 だっていないんだもんよ。
光井 タイトルは？
二島 あっ。
市川 忘れてた。
光井 なんですか、それ。え？ じゃあタイトル決めずに、話だけ考えたってことですか。
市川 うーん。
光井 本末転倒じゃないすか。
二島 しょうがないだろ？ 咄嗟のことだったんだから。
光井 しょうがないかなあ。
市川 次は忘れずにタイトルから考えよう。
光井 あ、そうだそうだ……

光井、袋からパチンコを3つ取り出す。ゴムはなく、木の枝だけ。

光井 じゃーん。
二島 うわ、懐かしい。
市川 どうしたの、それ。
光井 随分前に作ったんですよ。ほら、行きがけに子どもたちと遊んでた時に。
市川 へー。よく持ってたね。
光井 やっぱり小道具があると楽しいでしょ。ああ、屋内は危ないんで、フリっすよ、フリ。
二島 (市川に) 構え！ 照準よし！ 発射！
市川 バーン
二島 (光井に) 次！ 構え！
光井 はいはい。
二島 ちゃんとやれよ。

と、市川が小芝居を始める。

市川 「おいおいおい、そんな軟弱な腕前で、俺に敵うと思ってるのか？」
光井 おっ。

二島 本気だ。市川さん本気だ。

光井 「ふん、やって見なきゃ分かんねえぜ」

二島 おお。

市川 「へえ、やる気ってわけかい。いいだろう、受けて立つぜ」

二島 「光井さま、いけません。市川さまに敵うはずがありませんわ。どうかおやめください」

市川 あ、二島女役？

光井 「ふた子さん、下がって行ってください」

市川 ふた子さん。

光井 「俺なら大丈夫です。どうか安全なところで、見ていてください。必ずやあなたを、市川の手から救って見せます！」

市川 あ、そんな感じ？ あ、そう。えーっと、えーっと、「こいつは傑作だ。俺からふた子を救うだって？ やれるもんならやってみな。返り討ちにしてやるからよ」

光井 「市川！ お前のしてきたことは許されることじゃない。今ここで俺がお前に天誅を下す！ 覚悟しろ！」

市川 僕、何しちゃったの？

二島 (急に人が変わった)「位置について！」

2人、少し離れて向かい合う。

二島 「お二方とも、よろしいですな。それでは、始めさせていただきます」

2人、構える。

二島 「始めえ！」

光井 「市川あ！ バーン！（打つ）」

市川 「おおっと。シュパッ（避ける）」

光井 「くそっ。カチャカチャ（次弾を装填しようとする）」

市川 「隙あり！ バーン！（打つ）」

光井 「(当たる)ぐあっ」

光井、倒れる。

市川 「ふん、口ほどにもない。これでとどめだ！ すうう……(構える)」

光井 「と見せかけてバーン！（打つ）」

市川 「ぐはっ(当たる)」

光井 「油断したな、市川」

市川 「そんな……確かに当たはずなのに……」
 光井 「ふっ……。 (弾が当たったところから小さな写真入れを取り出す) 」
 市川 「それは！ そんなもので俺の弾を防いだというのか！」
 光井 「お前の弾を防いだのはこの写真入れじゃない。俺とふた子さんの絆の力だ。どんな凶悪な武器も、この思いの強さに勝てるはずがない！ (打つ) 」
 二島 (ふた子さん) 「きゃー！ 光井さまかっこいい！」
 市川 「くそお！」
 光井 「終わりだ！ (構える) 」
 市川 「と見せかけてバーン！ (打つ) 」
 光井 「(当たる) あぐっ」

光井、倒れる。

市川 「くっくっく……。甘い、甘いぜ光井……。思いの強さ？ そんなもので戦いに勝てるならなあ、俺はとっくに負け犬人生なんだよ。俺が勝てた理由を教えてやろうか。それはな……。努力だよ」
 光井 「真面目！」
 市川 「どんな思いでも覆せないほど、俺は鍛えている！」
 二島 「きゃー！ 市川さまかっこいい！」
 光井 「くそお！」
 市川 「終わりだ、光井。あの世で鍛え直してきな (構える) 」
 二島 「そこまでよ！ バンバン！」

急に、二島が背後から2人を打つ。
 2人、倒れる。

市川・光井 「ふっ……。ふた子さん！」
 二島 「(煙草を吸い) 悪いわね、2人にはここでくたばってもらおうわ」
 光井 「そんな……。どういうことだ！」
 二島 「あなたたちを戦わせ、ここで一度に始末する……。それが私の仕事」
 光井 「なん……。だと？」
 市川 「はじめから、このつもりだったってわけか」
 光井 「お前、何者だ！」
 二島 「ふっ……。昼間はお茶屋の看板娘ふた子ちゃん、その正体は！ 東條大臣直属の実動部隊がひとり、くノ一ふた子！ 参上！」

二島、決まる。

市川と光井が立ち上がる。

市川 ちょっとちよつとちよつと。

光井 いやいやいや。

二島 「大日本帝国憲法に代わってお仕置きよ！」

市川 ちよっとまって、二島。

光井 暴走。暴走っすよ、それは。

二島 え？

市川 そんな複雑にしないでいいでしょ。

光井 設定が細かい。細かいっていうか、面倒くさい。

二島 深みが出ていいだろ？

市川 そうじゃないんだよ。

光井 そうじゃないんすよ。

二島 ああ……。

市川 ていうか、途中別の役もやってたよね？ 立会人みたいな。

二島 はい。

市川 あれ、誰？

二島 あれは、部隊の元隊員で、ふた子の育ての親であり、忍びの師匠でもあるんですけど、

今は現役を引退し、お茶屋を営みながら町の様子を報告する諜報員の傍ら、ふた子を

見守る二次郎ですね。

市川 ふたじろう。

光井 なんでそんな役、出してきたんですか。

二島 親子愛の表現だよ。愛と戦いの物語になるだろ？

市川 (同時に) そうじゃないんだよ。

光井 (同時に) そうじゃないんすよ。

二島 ああ……。

光井 ちよっと、決闘の場面からもう1回やっていいいですか。

市川 そうだね。そうしよう。

二島 二次郎は？

市川・光井 二次郎はいいよ。

二島 ああ。

3人、配置につく。

そのとき、通信機の受信音が鳴る。

市川 この音……。

光井 連絡だ！

二島 本部から連絡だ！

3人、通信機を見に出ていく。

部屋には人がいなくなり、声だけが聞こえる。

二島 いや、久しぶりでピンときませんでしたよ。

市川 受信機壊れてなかったんだな。
光井 実は自分、ちよくちよく修理してたんですよ。

市川 そうなの？ 弄れる人なんだ。

光井 まあ、94式だけですけど。

二島 あれ、これどうやるんだっけ。

光井 これを耳に当てて、で、このつまみ使って調整です。こっちが送信機なんで、これを
回したら電気が通るので。

二島 ああ。

市川 本部の送信機も壊れてなかったんだな。

光井 むしろ本部が壊れてなかったんですね。

二島 おい、不謹慎だぞ。

光井 すいません。

二島 ちよっと、俺聞いておくんで。

市川 ああ、はいはい。うるさいね。

市川と光井が戻ってくる。

市川 なんだろ。撤退命令かな。

光井 不謹慎ですよ。

市川 ごめんごめん。

市川・光井 (笑う)

市川 今の結構かっこよかったよね。(構える)

光井 つすね。撃たれたと見せかけてバーン！

市川 やられた！……と見せかけてバーン！

光井 二重どんでん返し。

市川 で、市川の強さの理由が努力っていう。

光井 真面目か。

市川 真面目が正義。

光井 真理。

市川・光井 (笑う)

市川 ふた子さんは謎だったけど。

光井 あの人、ああいうところありますよね。

市川 面白いんだけどね。そうだ、さっきの写真入れ。あれ良かったね。

光井 これっすか？ 私物です。

市川 へー。家族？

光井 嫁と子どもっすね。

市川 あ、結婚してたんだ。

光井 まあ、元っすけど。別れてきたんで。

市川 そうなの？

光井 出征が決まった時に、もう帰れないだろうと思って。

市川 あ……ごめん。

光井 いやいや、良いんですよ。いつまでも待たせるのも可哀そうじゃないですか。それなら、新しい人と幸せになれたほうがいいだろうと思って。

市川 そんな、悲しいこと言うなよ。

光井 自分なんて、一端の一等兵。とびぬけて身体能力があるわけでもないし、いつ死んでもおかしくないんでね。いっそ死ぬ気で戦えた方が、少しは結果も残せるかなって。いいのか、それで。

市川 いやあ、嫁には泣かれました。でもね、子どものことを考えれば、その方が良いに決まってるんですよ。ただでさえ、田舎の素人演劇に夢中で、家のことは何もできないような男です。万が一帰ったって、また苦労かけてしまうんだ。

市川 違うよ、お前はそれでいいの？ 大切だったんだろ？ 肌身離さず、写真を持ち続けるぐらい。

光井 市川さん……今だけは、おっさんの戯言と思って聞いてください。大切だからこそ、手放さなきゃいけない時もあるんです。

市川 光井……。

光井 ただね、やっぱり思い出しますよ。アイツらの笑顔とか、別れ際の嫁の泣き顔も……（泣く）。まだ何も知らない娘の、あどけない寝顔を思う度、胸が痛くなってね……

市川、光井の肩に手を置く。

市川 帰ろう、光井。

光井 市川さん。

市川 僕みたいな若造が言っても、説得力ないだろうけどさ。そんなに大切な人がいるなら、死んじゃだめだよ。「絶対帰ってやるんだ」って気持ちで生き残るんだよ。

光井 でも、俺なんか……。

市川 大丈夫だよ。3人で助け合えば、この戦場だって抜け出せるさ。カエルでもなんでも食べよう。危険がせまったら、一緒に戦おう。何としても、3人で帰ろう。

光井 市川さん……。

市川 いいな、光井。

光井 はい……はい！

市川 行くぞ！

光井 はい！

2人、行きかけて戻ってくる。

光井 みたいな！

市川 みたいだな！

光井 えーちよつと今の良かったっすね。あんまり観たことない感じでしたよ。

市川 男の友情な。

光井 これはお涙頂戴っすね。

市川 ていうか光井、実際写真の中、嫁さんなの？
 光井 え？ ああ、これ飼ってた犬です。
 市川 犬かよー。
 光井 そもそも、死ぬ気だったらこんなところでカエル食ってないですから。
 市川 確かに。

二島、手にメモ紙をもって戻ってくる。

二島 終わりました。
 光井 ちよつとちよつと、二島さん、今凄いいい感じだったんですけど。
 二島 え？ ふた子？
 光井 それは終わりましたよ。別のやつ。
 市川 感動ものができたんだよ。
 二島 なんですか。何で俺のいないときにやつちゃうんですか。
 光井 だっていなかったから。
 二島 そりゃいないよ。やってたんだから、これ。
 市川 ごめんごめん。本部、何だって？
 二島 はっ。(メモを見ながら) 戦局はこちらに傾きつつある、前線北側の通信機が不調のため、後方のものと取り換え、修理されたし。なお物資がある場合は、これを届けること。

沈黙。

二島 誰が行きます？
 市川 誰がってもう、通信機持っていくなら3人全員だよ。
 光井 送信機と、受信機と、発電機とか電線とかと。
 二島 ああ。
 市川 取り換えて修理って、できないしなあ。吉田も五木もいないし。
 二島 え、あの2人出来たんですか。
 市川 できたよ。同盟通信で技術の人だったんだから。
 二島 ええ？ そうなんですか。なんで先に行っちゃったんですか。
 市川 僕らよりやる気があったからね。
 光井 ありましたね。血気盛んでしたね。
 二島 あー、だから血抜きが大変だったんだ。
 光井 筋も多かったっすけどね。
 二島 それは全員だろ。
 市川 そうなんだよ、僕、齒の隙間が微妙に広いからさ、すぐはさかってさあ……。

沈黙。

市川　みたいな。
二島・光井　みたいなな。

沈黙。

市川　行くかあ。

二島　行きますか。

光井　っすねえ。

市川　荷物まとめて。僕、文書類燃やしてくるわ。

二島　はい。

光井　洗濯物どうします？

市川　一応、洗って干しとこう。帰った時すごい臭いになるから。

光井　っす。

市川　あと、カエルさんたちも埋めようか。

二島　はい。(光井に)なんかお供え物あるかな。

光井　洗濯板立てます？

二島　そうするか。

光井　しかし、短刀ぐらいはありますけど、ほぼ丸腰はきついっすね。

市川　おいおい、何言ってるんだよ。今の僕たちには、これがあるだろ。(パチンコを構える)

光井　ああ！

二島　確かに！　飛び道具があると心強い！

市川　実際、結構役に立つと思うよ。持っていこう。

二島　伏線だったのか、光井。

光井　いや、さすがにたまたまですけど。

市川　「どんな思いでも覆せないほど、俺は鍛えている！」

光井　勝てる！　これは勝てますわ。

二島　「くノ一ふた子、参上！」

光井　二島さん、ホントにそれやるんですか？

市川　言ってる間に倒されそうだな。

二島　なんでだよ。

市川　あれだよなあ。

光井　はい？

市川　全部芝居だったらいいのにな。

光井　ああ……。

二島　違うっすよ、市川さん。

市川　え？

二島　現実が辛いから、芝居が楽しいんです。

市川　……えー。なにその名台詞。

光井　ちょっと感動したっす。

二島　だろ？　感動しただろ？

光井 そういうこと言うと台無しつすよ。
 市川 行きながらに続き考えようか。
 光井 つすね。名作を完成させましょう。
 二島 え？ ふた子さん？
 光井 違いますよ。ふたさんはもういいんですよ。
 二島 だってそれ、俺が出られないだろ。
 光井 途中から出てくればいいでしょ。
 市川 あらすじまとめようよ。
 二島 で、タイトルは何だったんですか？
 市川・光井 あ。
 二島 え？
 市川 また忘れてた。
 二島 ええ？ 本末転倒じゃないですか。
 市川 そういえば決闘の話でも忘れてたね。
 二島 決闘？
 市川 あれだよ、ふた子さんの。
 二島・光井 ああ。
 市川 もう「ふた子さん」じゃないと通じなくなっちゃったな。
 二島 決まりませんなあ、タイトル。
 市川 なかなか思いつかないんだよね。話はどんどん出てくるんだけど。
 光井 ていうか自分、思ったんですけど。
 市川 何？
 光井 話を作ってから、タイトルをつけた方が早くないですか。
 市川・二島 逆転の発想！。

3人、話しながら去る。
 おわり。

ユニット・ピコ 演劇公演「決められない男たち」

・ 2023年 2月 25日/26日 山口市 クリエイティブ・スペース 赤れんが

「決められない男たち」

脚本：中野志保

発行：ユニット・ピコ

MAIL unitpico@gmail.com

※ 上演希望の際は、必ずユニット・ピコまでお問い合わせください。